

それでも私の生き方を

朴 慶

私は朝、出勤したとき「안녕하십니까(アンニョンハシムニカ)」という。「おはようございます」ではない。時制に捉われないこのことばは来客があった時、受話器を取った時も使うため一日の間にどれくらい使うかわからない。大学一年生の時に初めてこのことばを覚え、卒業した後も使い続けることを選択した。

私が今年から所属する在日本朝鮮商工連合会（以下朝鮮商工会）は在日朝鮮人が営む事業の経理など経営面でのサポートを行うことが主な仕事である。解放後、祖国の地を再び踏むことが叶わず、日本に残留することになった一世の在日朝鮮人は困窮を極めた。飲食店や廃品回収、養豚などのわずかな資本で始められる経済活動を行った。同胞商工人と共に歩んできたのが朝鮮商工会であり、日本各地に事務所が存在する。総連組織の中で二番目に長い歴史を持ち、今年で結成 77 年となる。

新入りで経験も知識もない私がまず行うことは우리말(ウリマル)を覚える事だ。初級部一年の知識を、勉強をさぼってきた体に叩き込む。経営学部でもなかったため一から手探りで簿記の勉強を始めた。

何桁もの数字を見ることに加え、今まで前線で活動してきた朝鮮人の方と会うことも増えた。懐かしむように話す活動の経験は、私にとっては今後の活動のヒントになる。

今年はコロナの警戒も落ちつき、花見、運動会、夏祭りと季節の催しごとに朝鮮人が학교(ハッキョ)に集まった。そのため朝鮮学校での草刈りや、テントの設営のため外で活動することが増えた。行事の準備も新入職員が率先して行うことである。朝鮮人は季節を問わず行事の後は七輪（私の地域は加工した一斗缶）を囲み焼肉を食べるため、炭の火を起こすコツも教えていただいた。社会人 1 年目はいつもの夏よりも額に汗をかき、肌の日焼けは増えた。しかし足を運ぶごとに考える。日本社会でこうした朝鮮人が集まれる場所がどれほどあるだろうか。

思えば私がはじめて商工会を訪れたときは雪が降っていた。私は大学卒業を目の前に控えた学生最後の冬に進路を決められずにいた。「朝鮮人として生きていくためにはどうしたらいいのか」。このことが頭から離れなかった。真っ先に考えたのは、私の所属していた学生団体の専従活動家である。そんな私の脆い決意は父の怒声で崩れた。「おまえは日本人だ。日本人のおまえに何ができるんだ。男は金を稼がないといけないんだ。金も稼げないのに政治家まがいのことをして何になるんだ」。一番身近な朝鮮人から浴びせられたことばだが、もっともなことばだった。若くして私が生まれ、大学まで通わせると一心に働いてきた父。そして朝鮮人であると周りに告げず、「日本人」になりたいと常に思っていた父は、名前も国籍も「日本人」のものだった。私が活動家になるなど言語道断だった。専従の活動家が経済的に苦しいのは事実である。父から言われなくともそれは直面する。「北朝鮮制裁」。その逆風を真正面から受けているのは、専従の活動家や教員である。厳しい状況にある朝鮮人を頭ではわかっている、私は直視していなかった。

気が付けば私の疑問は、「なぜ朝鮮人として生きるのか」。に変わっていた。朝鮮人は国籍や名前など不平等な選択を否応なく突き付けられる。私のようにダブルルーツを持つ人も増えているためより複雑だ。活動家とあれば生活することすら苦しい。なのに、なぜ。進路を決めた後は、先の見えなかった私の未来も急に現実味を帯びた。学生の終わり和社会人の始まりの入り混じった今までにないほど忙しい春休みを過ぎた。落ち着いた時にはベランダの広い新しい部屋で荷解きをしていた。

私の選択に後悔はない。何度躊躇って、逃げ出したかわからないが、疑問が変わったときには答えは出ていたのだと思う。選択できたのは活動を通して出会った人がいるからであり、これからも人と向き合い続けるために選択した。朝鮮人の状況は依然として厳しい。それでも私は選びたい。一緒にいたい人たちと、これから作り上げていきたい社会を。